

諸祭行事御案内

六月三十日・七月一日肅行

『浅間神社例祭 お山開き』

国の重要有形民俗文化財に指定されております。当社の浅間神社の例祭は、六月三十日・七月一日に執行されます。氏子青年会の奉仕によりお山もきれいに除草され、雄壮なる富士山を思い起こされる精悍な姿を再現致します。子供達の歓声と「六根清浄」の唱え詞が夏の風物詩となっている「お山開き」に登拝して、国の隆昌と平和をお祈りして頂きたく、御案内申し上げます。



氏子青年会による苗木の配布も毎年大盛況！先着 1,000 名様にお配りしております

『氏子子供納涼踊り大会』

七月十九日・二十日開催

七月十九日、二十日に氏子青年会の主催により開催されます。境内にヤグラを組み、飾り付けをし、子供達には、ジュース、アイスクリーム等を無料で配布し、楽しいひとときを過ごして頂きたく企画しております。尚、氏子青年会々員で、模擬店も出店し、格安で、おいしい、安全なものを取り揃えてお待ちしております。

『秋季例祭』

九月十九日 午後三時肅行

『足利学校・雅楽の夕べ』

九月二十三日 午後六時開催

この日は約四百年前、当社が上野照崎の地より、現在地である、長左衛門稲荷神社の境内地に遷りたる記念の日であります。

十九日に例祭を執り行い、二十三日に神賑として、著名文化人をお招きし、日本文化を見つめなおすという趣旨の講演会である「足利学校」と、中秋の空の下「雅楽の夕べ」として、雅楽の奉納演奏が特設ステージにて催されます。多くの方々の御観覧をお待ちしております。

形代は、六月二十九日迄に神社にお納め下さい。

『敬神旅行会』

十月十四日・二十五日開催

第六十三回敬神旅行会が十月に開催されます。



今年は、宮城県に鎮座する陸奥国一宮 塩釜神社を参拝します

古くより航海・潮の満ち引き・海の成分を司る神、左右宮の御祭神は武運・国土平定の神として篤く信仰されてきました。重要文化財でもあるご本殿は宝永元年(1704)竣工と、至る所に歴史を感じられる古社であります。その「場」でしか感じることの出来ない時間が何よりの御恵となり、多くの方の琴線に触れることと存じます。ご参加をご希望の方は、お誘いあわせの上、神社までお申し出ください。皆様方のご参加をお待ちしております。

神事は心のかよった小野照さままで！

受 験 合 格 祈 願	芸 能 上 達 祈 願	厄 除 祈 願	心 願 成 就	自 動 車 清 拭	社 運 隆 昌	初 宮 詣	七 五 三 詣	十 三 参 詣	結 婚 参 詣	寿 齢 奉 告 祭	地 鎮 祭	其 他 諸 祭 事
-------------	-------------	---------	---------	-----------	---------	-------	---------	---------	---------	-----------	-------	-----------

『地に足をつけて』

宮司 小野貴嗣

今年の大祭は好天に恵まれ、連合渡御の各町神輿が輝きを以った神輿振りで氏子の元気を大神さまにご覧頂けた素晴らしい祭り模様であった。

他方世情はというと、地球環境保全の新しいエネルギー対策の推進と使い尽くされた施設での火力発電による二酸化炭素汚染と地球温暖化そして原子力発電による悪夢の不安という難題や普通の国家創造のための憲法改正に軍隊暴走や文民統制確立の不安解消課題を抱えている。夫々の見解である理想論・実践論・創造論・日本解体論に正対する時が来た。

解決への鍵は、日本という国が古代からどのような変遷をたどって現代に繋げてきたかを注視する中に、「国家像と民族の生き抜く知恵」が見えてくる。その国家像は自国の文化・伝統と国柄を活かして創られるものであり、国民一人一人がアイデンティティを誇れるものでなければならぬ。

「正しい自立の姿勢と意欲の向上」が日本(己)を識り、進むところ(課題・目標)を明らかにして、共に努力を積み重ねて実を執ることに繋がって行く。

小野照さま

平成 27 年 7 月 発行
第 97 号
発 行 所
小野照崎神社
東京都台東区下谷 2-13-14
電 話 03-3872-5514
F A X 03-3872-4238



七夕神事成立の変遷

権補宜 小野亮貴

現在は身近な年中行事として短冊に願いを込め、笹竹に吊るして星に祈りを捧げる七夕祭りですが、七夕の原初は、稲の開花期にあたる旧暦の七月に執り行われた、収穫の無事を神と祖先に祈る「棚機神事」であったとされています。この神事の為に選ばれた女性は、禊をして身を清め、正装して湯河板拳という水辺の機屋に籠って神に奉る衣を織り、それをお供えし、ムラ(クニ)の安寧と繁栄、そして今年の収穫の無事を祈願しました。水の上に棚を作って機を織ることから、これを「棚機」といい、機を織る乙女は「棚機津女」と呼ばれ、古来、正月の若水【※1】に対応する大事な水の祭りであり、現在の盆に対応する祖先祭祀の原形として祭祀が執り行われてきました。

現在の七夕の象徴として私たちのよく知る「織姫」と「彦星」のイメージは、琴座のベガを「織女星」、鷲座のアルタイルを「牽牛星」として、二つの星が、年に一度、旧暦の七月七日の夜に最も接近する現象を描いた中国の伝承と祭事が奈良時代に伝わり、それを基に形作られました。天帝が夫婦にさせた機を織る娘「織女」と牛飼いの「牽牛」が、あまりに仲が良く仕事をしないので、怒った天帝が天の川を隔てて別居させ、年に一度だけ逢うことを許したという切ない恋物語をベースに、天上で機を織る手芸の神となった織女に、針仕事や習字、詩歌などの上達を祈願する「乞巧奠きこうでん」という祭事が加わり、私たちの良く知る現在の七夕像が生まれました。

この「機織りの巫女」という共通点から、棚機神事の祭日が旧暦の七月七日に定められることとなります。そして、機織りが終わり、本格的な祭祀の始まる七月七日の夕方を「七夕(しちせき)」と称していましたが、本来の意味との混同から「たなばた」と読まれるようになり、すっかり定着した織女と牽牛の説話は、日本流の「織姫」と「彦星」の伝承として根付いていきます。また、日本の伝承では、独自の

大祓式・開山式

六月三十日 十時齋行

昭和天皇が観覧されたのを契機に、今日の大きく豪華な七夕祭りへと移り変わっていきます。

このように、現在伝わる七夕行事は、日本古来の神事と中国古来の伝承、そして、日本各地の伝統や風習などさまざまな要素が複雑に絡み合い、更には古代から現代に至る迄、長きに亘り時代と共に、その形を少しずつ変え、今に伝えられています。

行事や伝承は、後の世に祈りを残し、祈りの形や理由は変われど、祈る人の想いは然程も変わらず、皆で立ち止まり、手を合わせ、心を静め、感謝をし、祈念をし、自らを省み、他人を慮る。伝統的な行事や伝承には、神を意識し、神を感じ、祈る心を養う機会が潜在的に組み込まれ、日本の国柄を守り伝えていく一助として、過去を守り、今を守り、未来を守り導いていく機能が有されています。その心を後の世に守り伝えていくことこそ、現代に生きる私たちの使命なのかもしれません。

【※1】織物の生成過程で水は不可欠の存在である為、対の存在になったとされる。若水・立春の日に歳神様がやってくる恵方にある井戸から水を汲み、神殿に供え、陛下の朝食にお出する。若水は邪気を祓い生気がみなぎる生命の水、よみがえりの水とされている。奈良時代の宮中行事であったが、民間にも浸透し、元日の朝に行うようになった。



平成二十七年新入職員のご報告

渡邊 亮 権補宜

昭和五十九年生まれ。平成二十七年三月 國學院 大學 神道学専攻科 修了。三月より一か月の研修期間の後、四月一日付けで、当社権補宜を拝命。

登場人物として、「夏の大三角」最後の一つである白鳥座のデネブも二人の橋渡し役となるカササギとして登場し、物語に華を添えます。

古代に生まれた秋の豊作と国の安寧を祈念する棚機神事は、宮中の年中行事として長く伝承が保たれて来ましたが、それまでは貴族と一部の武家の行事でありましたが、世情の安定した江戸時代、幕府による「五節句」の制定、そして寺子屋教育の普及によって、民間に幅広く知らしめられることとなります。民間への周知が進むと、国の安寧と収穫の無事を祈る「棚機神事」は、笹竹に短冊や縁起物をつるして女の子は手芸の上達を願い、男の子は手習いの上達を願う家庭の行事へと形を変えていきます。

江戸末期には手技の上達を願い、各家の庭に、そろばんやすずり、筆、帳簿までも笹に下げられるようになったといわれています。現在の代表的な七夕飾りもこの頃に定着したものになります。

吹き流し…織り糸を垂らした形を表し、機織や技芸の上達を願います。網飾り…魚を捕る網を表し、豊年豊作大漁の願いを込めて飾ります。幸運を寄せ集めるといいう意味も含まれています。

折鶴…長寿のシンボルである鶴を折り、延命長寿を願います。神衣…棚機津女が織り神にささげた衣を表し、裁縫の上達を願います。災いを移す形代として、祓具の意味も持ちました。

巾着…金運上昇を願い、折り紙で作ります。くずかご…清潔を保ち、ものを粗末にしない、清潔と節約の大切さを養います。

明治時代になると、七夕を含む五節句の祝日が廃止され、七夕行事は衰退の一途を辿ります。七夕行事復活の契機となったのが、現在も盛大に行なわれている仙台七夕祭りです。町の活性化と伝統の護持と題目に、昭和二年に仙台七夕は催され、以来年々盛大さを増し、

氏子に花を!

氏子青年会

六月三十日十八時より二十時まで本紙引換券持参の参拝者に植木の苗木を差上げます。先着千名様(大人に限る)

花の苗木引換券

六月三十日午後六時より

氏子青年会

富士浅間神社例祭

お山開き

六月三十日・七月一日

十時〜二十時

当社の境内に聳える富士山は、江戸時代に富士信仰を布教した南沢正兵衛の門人である東講 講元 山本善光が、氏子はもとより江戸八百八町に広くご浄財を募り、富士山より岩石を船積みして運び、隅田川より荷車にて当地まで陸送をし、天明年間(一七八二年)に築山され、その麓に富士浅間神社をお祀りしました。そのご浄財の額もさることながら当時の運搬技術や運搬環境を思うと、その大変な努力とそれに増しての信仰心の力強さに驚嘆させられます。築山されてから二百三十年の月日が経ちますが、登拝が二日間に限定されていることや、葦や草の根がしっかりと張り巡らされて土を強固にするといった先人の山守りの知恵に護られ、今も昔ながらの荘厳な姿を見せています。

六月三十日の十時より、夏越の大祓式と富士浅間神社の例祭である開山式が行われます。大祓式では大祓詞の奏上の後、人の形に切り抜いた「形代」に罪や穢れを移し、切麻にて半年間の穢れを祓い、旺盛な生命力が神秘的な除災の力を有すると伝えられる茅草で作られた「茅の輪」の中を左、右、左と八の字に三回通り、半年間の無事を感謝するとともに、残りの半年間の無病息災を祈ります。開山式では、御飯屋での神事後、祓主を先頭に氏子崇敬者が列立し「六根清浄」を唱えつつ登拝をし、頂上にて四方を祓い天下泰平と五穀豊穣を祈りを捧げ、本山である富士山に向かい遥拝をした後に下山をして祭事のすべてを終えます。どなたもお気軽に参列ください。

ご参列できない方は社報に付属しております「形代」を用い、下記の方法でお祓いの所作を行った後に、初穂料を添えて当宮へお納めください。「大祓式」当日祭壇にお供えし、一緒にお祓い致します。



1. 「形代」にお名前と年齢を記入します。



2. 頭の前から足の先までの、あらゆる部分を「形代」で撫でて、身体の外にある罪穢れを遷します。



3. 最後に、「形代」に大きく息を三回吹きかけ、身体の内にある罪穢れを遷します。